

会長就任のあいさつ

会長 佐藤 巧

早春の息吹身に染む今日この頃、会員の皆様方には
 普段からのご支援ご協力に感謝申し上げます。先の拡
 大評議員会において、前会長小野英治氏及び副会長河
 野信夫氏・同松村輝博氏が勇退され、新たに会長佐藤
 巧、副会長柴川英敏、野々下静が選任されました。引
 き続き皆様方のご指導ご鞭撻をお願いして身に余る
 大役を務めたく、直敷くお願い申し上げます。

振り返りますと、佐伯史談会は昭和三十三年に発足
 した鶴岡郷土史研究会を母体に、佐伯市南郡を包括す
 る合同史談会として昭和四十年に「佐伯史談」を創刊
 したのが始まりでした。当時は戦後の復興から高度成
 長時代へと邁進した時期に当たり、人も町も近代化の
 波に飲み込まれ、郷土の歴史遺産すらも危機にさらさ
 れていました。そこで出現したのが佐伯史談会です。

その礎を築いた先覚者羽柴弘先生の偉業を忘れるこ
 とができません。先生は近代化の中で消え去っていく
 郷土の文化遺産を愛い、「一体佐伯市は何処に行くの
 か…」と疑問を投げかけ、「文教都市佐伯」を主張され
 ました。藩政時代の佐伯文庫や藩校四教堂が輩出した
 人材等を顧みて、学校教育と社会教育の充実を訴え、
 文化会館や図書館、資料館の建設を提唱しました。ま
 た文化財の受難を嘆き、市民の浄財を募って三の丸櫓
 門を修復し、三の丸御殿の移転保存に功績を残されま
 した。先生は自ら会長に就くことはせず、幹事として
 十四年間に一二二号までの佐伯史談を謄写版で発行
 し、常に問題提起を欠かさず、多くの研究者を育て、市
 民の称賛を得て会員会友（会誌發送数）は五〇〇に及
 びました。しかし終に体調は限界に達し、目はかすみ
 手は動かなくなつて、最後の編集後記に次のように締
 めくくつています。

この『謄写史談』を愛読くださつてありがとうございます。私
 もよい仕事を一二二号まで貫きとうしてうれしい。あ
 るいはちょっと真似の出来ないほどの大作業。やり終
 えて満足です。しかしもう限界です。ありがとう。

その間、『佐伯市史』『蒲江町史』の編纂を終え、『本匠村史』の編纂途次で入院され、昭和五十六年十月に亡くなられました。したがって、佐伯史談会は昭和五十五年に規約が改正され、これまで幹事一人が担っていた編集と事務を分割し、編集長を置いて一二二号から『活字史談』となりました。私が入会したのは昭和五十八年で、既に羽柴先生の姿はなく会長は高木嘉吉氏、事務局長は清田義雄氏、編集局長は塩月佐一氏でした。ところで、私は所信表明を書くつもりで会誌を振り返っていたのですが、この三〇年間の『佐伯史談』に発行者名である歴代会長の名が遺漏していたことに気づき、急遽謝罪文に替えて事情を申し上げる次第です。昭和六十二年の一四四号までは「発行者佐伯史談会・会長兼事務局長塩月佐一」と記名がありました。私が事務局長になった一四五号から会長名が消えてしまっているのです。思い起こせば当時、佐伯史談会幹部は既に高齢化が進み、会長高木嘉吉氏や事務局長清田義雄氏が相継いで辞任され、やむなく塩月佐一氏が会長兼事務局長を後継、編集長には専属の後藤知久氏を迎えていました。

ところが数年せずに塩月佐一氏が入院され、急遽役員会が開かれました。副会長兼会計の山本保氏が健康に自信がないと次期会長を固辞されたため、やむなく代行委員会が置かれ、一四五号は会長未定のまま空白となったのでした。一方、事務局長の人選は、顧問の清田義雄氏から「もし候補者がいない場合は僕が補佐するので君がやれ」と言われ、新人で未経験な私だからこそ受けてしまったのでした。その後、一四六号には山本保会長の正式就任が記録されていますが、発行者の会長名は空白のままでした。当時は現在のような編集委員会は開かれず、専属の編集長に一任されておりました。山本保会長は控えめな方でしたから、あえて黙っていたのでしょうか。それが前例となり三〇年間も空白のまま推移してきたのです。自分が会長に就任してはじめて気づくとは、歴代会長に対して申し訳なく、当時の事務局長としての責任を痛感する次第です。所信に替えて深謝申し上げます。

歴代会長 山本保・矢野彌生・汐月三代吉・矢野徳彌・真柴茂彦・久保彰三・小野英治、皆々様へ。